



(題字は初代学長 山田守英氏)

第 129 号

平成19年9月10日

編集 旭川医科大学

発行 教務部学生支援課



「然別湖」(鹿追町)

(写真撮影：学生支援課)

退任にあたって……………八竹 直…………2	第54回(平成19年度)北海道地区大学体育大会
リラ冷えの季節での別れ……………塩野 寛…………3	開催される……………11
アイスランドで開催された新生児スクリーニング	合同演奏会が開催されました……………12
学会に出席して……………石川 睦男…………4	サマーコンサート開催される……………12
大学としての旭川医科大学底上げのために	「音楽のタベ」開催される……………13
……………蒨田 芳男…………5	クラブ紹介
「元気が出る教室」をめざして…………長谷部直幸…………6	準硬式野球部……………14
教授就任のご挨拶……………内藤 永…………7	山 岳 部……………14
卒業生の動向(医学科)……………8	医療研究会……………15
卒業生の動向(看護学科)……………9	ボランティア部……………15
医大祭2007が開催されました……………10	教員の異動……………16
	医大祭2007を終えて……………高橋 未来…………16



退任にあたって

第6代旭川医科大学長 八 竹 直

本年6月末日で学長を任期満了退任し、旭川医科大学を退職しました。大阪から昭和58年に第二代泌尿器科学講座教授として赴任してから、約四半世紀もの間、当大学にお世話になったことになります。

さて、私が赴任した当時の旭川医科大学は開学後10年目で、新設医科大学としての活気と緊張感がありました。当事の教授陣は非常に厳しく、かつ愛情一杯の教育をされ、初期の頃の国家試験合格率は常に全国のトップクラスでした。

当大学は開設時から楔形教育という、当時としては最先端のカリキュラムが行われていましたが、全国的な医学教育改革の波が押し寄せ、チュートリアル教育、統合カリキュラム、コアカリキュラム、診療参加型臨床実習、CBT、OSCEなどなど次々と新しい教育プログラムが導入されました。また平成16年4月からは卒後の臨床研修が必須となるなど、目まぐるしい改革が進行しています。しかしこれらが日本の医学教育に妥当なのか否かについてはまだまだ検証出来る段階ではありません。私はこれらのプログラムには成熟していない部分が多々あるように感じています。これは医学科に限らず、看護学科のカリキュラムについても同じことが言えます。そこでこれら医学・看護学教育を限られた教員や予算の中でより良い方向に改善する方法を研究・実践するために、今年初め「教育センター」を設置し、専任の教授を選任していただき、センターの活動をスタートしました。皆さんの協力でこのセンターがうまく機能することを期待しています。

また、旭川医科大学の教育面でのもう一つの問題点は大学院です。医学科は設立以来60～70%位の定員充足率しかありません。その上臨床研修制度や専門医制度の影響から充足率を上昇させるのが困難でした。これでは大学としての評価が低下します。そこで昨年「大学設置・学校法人審議会」の審査を受けて、この春から博士課程を改組し、カリキュラムの改革と定員削減を行いました。これにより良い結果が出ることを心から願っています。いずれにしても大学院をもっと魅力的かつ活性化し、大学の研究活動の源泉にしなければならないと思います。

私の学長の任期中の最大の仕事は平成16年に当大学を円滑に法人化することでした。これを「繊細・柔軟且つ迅速」をモットーとして行いたいと約束しましたが、現実的にはなかなか難しいことでした。法人化のためには学内の色々な組織や規則の改変が必要でしたし、運営するお金の収入支出の仕組みを大幅に変える苦勞がありました。しかしこれらはすべて法制度改革による大学内部の問題で、この変革によって大学の本来の任務である教育・研究・診療に影響が出ないように努力したつもりです。しかしこれは逆に目に見える成果としては分かり難くかったかもしれませんが、法人化3年間の教職員の大変な努力の結果により、この春に申請した国の色々なプロジェクトに対する成果が最近ようやく出始めました。先ず基礎研究を先進的な医療へ橋渡しするための「橋渡し研究支援推進プログラム」に道内3医学大学共同で申請した「オール北海道先進医学・医療拠点形成」が採択され、次いで「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に当大学が申請した「育児と介護をささえるオールホスピタル計画－5段階教育プログラム『二輪草プラン』で安心復職－」が採択されました。さらに「がんプロフェッショナル養成プラン」に3医学大学と北海道医療大学共同で申請した「北海道の総合力を生かすプロ養成プログラム～大学、地域、病院の連携を生かしたがん専門医療人の育成を目指して～」も採択されたとの報に接したところです。大学を挙げて、これらの採択課題に立派な成果を出して下さるものと確信しています。

なんとか法人としての大学運営のスタートは切れましたが、解決すべき問題は山積しています。これから全教職員・学生諸君が一体となってこれらを解決し、より良い旭川医科大学を育てていただく事をお願いするとともに、旭川医科大学の素晴らしい前途を祈念して退任の挨拶といたします。



リラ冷えの季節での別れ

前副学長（教育研究及び厚生補導担当） 塩 野 寛

紫や白の花のリラの花が咲き乱れ、あまい香の漂う季節になってきた。

平成19年6月いっぱい旭川医科大学理事・副学長の任期が終了するのに伴い停年9ヵ月前に大学を去ることになった。

平成4年11月に島根医大（現 島根大学医学部）から旭川医大に就任して、教室員は助手と事務官がそれぞれ1人と3人の最小の教室であった。年間30コマの講義と40体の司法解剖とDNA多型の個人識別への応用の研究にあけくれる毎日であった。平成7年、卒業生の清水恵子（現 法医学教授）がはじめての大学院生として入学し、水上 創（現 東京医大法医学講師）、斉藤、小川、吉田と5人の院生が卒業していった。この間研究の範囲もひろげ、薬剤部教授 松原和夫と清水は、法医中毒学（犯罪関連毒物の分析と体内分布）の研究をはじめた。すなわち司法解剖となった中毒事例に対して、薬毒物分析法の開発・体内分布を検討するとともに、犯罪に関連して用いられる薬物の作用機序の解明を検討し、法医鑑定に应用することである。

研究の幅が広がるにつれ司法解剖も増加し、平成18年度は138体と平成5年の3倍以上となり、全道の司法解剖の43%を占めるようになった。2人の医師で分担して解剖するようになって、あまり負担は感じられなかった。

このような時期に平成15年6月頃であったが、新しく学長になられた八竹 直学長より、教育研究及び厚生補導担当副学長を引き受けていただけないかの話があった。私には任が重すぎる、法医学教授の引き受ける仕事ではないとして一度は断ったのであるが、どうしてもということで引き受けざるおえな

くなった。これに加えて評価、入試改革、講座の統合など大変大きな問題をかかえての出発であった。

平成16年4月から国立大学の国立法人化に伴い、内部の機構改革、法改正など問題は山積みであった。この法人化に伴い理事・副学長として新たな役職につくことになった。これとは別に、大学評価・学位機構より、医学部の教育評価の専門委員として、平成14年度及び平成17年度の2度にわたり、他大学の評価にもかかわってきた。

多様化した入試方法の中で推薦入学とAO入試を統合したナナカマド入試を新しくはじめ、地域枠入学にも検討をはじめた。法医学の教授をやめて、理事・副学長に専任となったのは平成17年4月であった。平成17年11月には教え子の清水が教授となり、本学最初の医学科の女性教授となったのは、存在15年間の私の最大の喜びでもあった。

国立法人化した地方の単科の医科大学の生き残りも大変難しく、これからの大学首脳部は苦勞されていくことと考える。

司法解剖も私が法医に入った頃は、北海道では炭鉱爆発による解剖が年に数回はあったものである。今はいかに医療事故がらみの解剖や高齢化社会に伴う独居老人、アルコール依存症がらみが多いことか。

大学を停年退職しても、今までかかわった事件の鑑定書が存在するかぎり、裁判との縁は切れることはない。これからも証人として裁判にかかわっていくのであろう。

長い間の大学生活が無事終わったことに感謝するとともに、旭川医大のますますの発展を祈願して筆をおきます。



アイスランドで開催された 新生児スクリーニング学会に出席して

前 病 院 長 石 川 睦 男

退任にあたっての趣旨で「かぐらおか」から原稿依頼を頂きましたが、すでに旭川医科大学病院ニュース100号に「病院長を退任にあたって」と掲載致しましたので、学会で訪問したアイスランドについて報告をします。

6月6日から12日までアイスランドで開催された第5回ヨーロッパ新生児スクリーニング学会に出席するためレイキャビークに向かいました。アイスランドは北緯63度～66度に位置し一部は北極圏にかかっているため6月は白夜でしたが、気温は10℃前後でした。アイスランドは9世紀から10世紀にかけてバイキングが移住して国づくりが始まりました。バイキングは8世紀から300年以上にわたって西ヨーロッパを侵略したスカンディナヴィアの武装船団（海賊）をさす言葉であります。航海術は卓抜で他の民族は対抗できませんでした。アイスランドに向かう飛行機の中で、ランニングシャツ一枚の逞しい、見るからにバイキングの末裔とわかる集団に乗り合わせたが、彼らは年一回のバイキングの集会に世界各国から集まってきているとのことであった。彼らはバイキングの子孫であることを大変誇りに思っています。世界初の女性大統領がアイスランドに選出され、また、彼女がレーガンとゴルバチョフの会談をレイキャビークで設定し以後、東西冷戦緩和に向かったのは記憶に新たなところである。人口は約30万人で15歳以下が25%を占め出生率の高い、若々しい国であり、言語はアイスランド語で英語やデンマーク語を小学校から習うためトリリンガルが大半である

学会の特別講演で「アイスランド住民の遺伝学的歴史」を拝聴したが、9世紀頃ノルウェイやスエーデンからバイキングが現在のイギリスのブリテン諸島を経由して移住し定住した。父親からのみ由来するY染色体、母親から由来するミトコンドリアDNAの臨床遺伝学的研究から、男性のバイキング

がイギリスから女性を略奪して現在のアイスランド人の起源になったようである。アイスランド人の遺伝情報の蓄積は世界に共通した代表的疾患の分子遺伝学的分析の発見競争の中心的役割を果たしている。このようなバックグラウンドもあることから、アイスランドでヨーロッパ新生児スクリーニング学会が開催されたのも納得できます。さて、新生児スクリーニングはフェニルケトン尿症（PKU）の早期発見、早期治療が確立し1961年のGuthrie法の開発により全世界に急速に普及しました。ヨーロッパの42カ国においては76%の新生児が一つ以上の疾患のスクリーニングを受けています。38カ国でクレチン症、37カ国でPKU、12カ国で先天性副腎過形成症などであり国により異なっています。我が国においては上記の3疾患に加え、メープルシロップ尿症、ホモシスチン尿症、ガラクトース血症の疾患について、新生児マススクリーニングが行われています。現在、帯広の周産期中心の専門病院で臨床医として多くの妊婦、産婦、新生児に接している日常において新生児マススクリーニングはハイリスクスクリーニングを含め重要な課題であります。ちなみに、今回の学会に参加した日本人は私だけでありました。

さて、学会以外の話題としてアイスランドは多くの火山があり間歇泉があるため、この地熱による豊富な温泉を利用して住宅の暖を安価に得ています。また、シャワーの湯量はこれまで利用した世界のどのホテルよりも豊かなものでした。一方、物価は高く、この地の名物料理タラやクジラを食べるときに注文したシャブリの白ワイン一本が1万円したのはビックリしました。しかし、ブルーラグーンというコバルト色の巨大な露天風呂に家内と一緒に入りましたが、ヨーロッパや米国から水着ではありますが、多くの老若男女達と露天風呂で裸のつきあいもできおおいにエンジョイしました。



大学としての旭川医科大学 底上げのために

教育センター 教授 蒔 田 芳 男

平成19年5月10日付けで、新設された教育センター専任教授を拝命いたしました。新臨床研修制度に始まった日本での医療者養成コースの変革の時に、重大な任務を任されたものと考えております。もとより微力ではありますが、本学の発展のために更なる力をつくす所存であります。宜しくお願い申し上げます。

昭和62年に本学の9期生として卒業し小児科学講座に入学しました。大学院医学研究科に進学し、一年間の小児科での臨床研修後、第一生化学講座にて神経生化学領域の酵素タンパク解析と分子生物学を学びました。国内臨床遺伝学、細胞遺伝学の数少ない研修場所の1つである神奈川県立こども医療センター遺伝科のもとに一年の国内留学をさせていただきました。横浜は、背景人口が800万人ですので、旭川医大の背景人口である80万人の10倍の人口を擁しております。先天異常症は、一定の確率で生じるものですので、出生人口が多い方が多くの症例を学べる利点があります。その後、連鎖解析の研究のために、長崎大学医学部原爆後障害研究施設変異遺伝子解析研究分野（通称原研遺伝）に3ヶ月の国内留学の機会を得ることができました。小児科での病棟医長を経験した後に、公衆衛生学講座助手として遺伝子診療カウンセリング室の立ち上げを行いました。その後小児科学講座に戻り、助手、講師を勤めさせていただきました。これまでの臨床の継続としての私の専門領域である臨床遺伝学ですが、院内処置として設置されている遺伝子診療カウンセリング室の藤枝憲二室長の許可をいただき、診療を継続できることになりました。遺伝子診療カウンセリング室は、平成19年2月に病院一階訪問学級の奥に部屋を設置していただきました。カウンセリングの実数も年間数名の状態から月間複数名の状態になっており、先進医療を担う大学病院診療の側面からの支援体制を提供できるようになりたいと考えています。

この7月17日からの医学教育関連週間は、大きなインパクトを与えてくれました。それは、7月17日の医学教育振興財団主催の第19回医学教育指導者フォーラムに始まり、18日には文部科学省主催の医学歯学教育指導者対象のワークショップ、20-21日の日本医学教育学会で終了しました。ここには、様々なseedsの紹介とともに日本の医学教育も問題点や直面する問題の提起がありました。医学教育のトレンドを掴むには、絶好の機会となりました。ここで情報を配信できるよう教育センターとしての情報提供能力を高める必要のあることを確信しました。また、日本医学教育学会では、大学カリキュラムに関しての学生のセッションが設定されており驚愕的な思いを持つとともに医学教育が大きな変革期にあることも実感できました。

旭川医科大学病院は、平成18年度をもって最終的な改築工事を終え、より高度な医療を行う体制が確立しました。先進医療を提供する機能は、大学病院に課せられたものであることは言うまでもありません。しかしながら大学本体の機能は、私たち医療従事者の「後継者の養成」にあるという事実があります。教育の充実無しに、大学は存在できません。皆様の愛する旭川医科大学が、様々な面において外部の評価に耐え、新たな発展をするためには、医学科看護学科において入学から卒業までの教育の整合性の確保、新しいカリキュラムの構成、教員資質の向上など大学の医育機関としての本分を底上げしていく努力が必要と考えています。ともすれば、教育センターが発信する情報は、忙しい皆様をさらに忙しくするかもしれません。旭川医科大学が、日本での医療者養成コースの変革の時にタイムリーな対応ができるよう、教育センターとして企画立案能力をもつことが必要と思います。皆様のご協力を切にお願い申し上げます。



「元気が出る教室」をめざして

内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科分野
教 授

長谷部 直 幸

この度、循環・呼吸・神経病態内科学講座を担当させていただくことになりました。本学2期生として、創世記からお世話になった母校に恩返しをする機会に恵まれましたことを、心から嬉しく思います。初代小野寺壮吉先生、先代菊池健次郎先生のもとに培われた良い伝統は受け継ぎつつ、教室員一同とともに知恵と力を結集して、新たな時代にマッチした理想の教室を作りたいと思います。適応までの猶予期間は許していただけず、就任直後から内外を問わず様々な難問をいただき奔走していますが、皆様の期待の大きさを実感しつつ決意を新たにしています。

私達の内科は循環器、呼吸器、神経、腎の生命に直結する広範な分野を担当しています。これらの専門分野を「酸化ストレス」をひとつのキーワードとして縦横に連結し、総合力のある臨床医・研究者を育成することが目標です。新臨床研修制度の導入以来、地方の医科大学はまさに逆風に直面しています。しかし、このような時こそ、思い切った発想の転換と工夫を実践する好機であり、我々の真の力が試される時です。当面の教室運営の合言葉は「元気が出る教室」そして「人が集まる教室」です。様々な観点から教室員が元気を出せる工夫を講じます。それが人の集まる教室に繋がり、ひいては大学の発展に資するものと確信します。意欲溢れる人材を集め「人と知識と技術をいきいきと動かす」ことのできる理想の教室を実現させたいと思います。

一昨年始めた「私の一カ月計画」という企画があります。ひとつの知識や技術に目的を絞り、国内外・基礎・臨床を問わず、一カ月の自由期間に得た最先端の情報や体験を、教室に還元する企画です。見れば納得できる情報や手技の確認、人的交流の拡大、長期留学の下準備など様々な利用価値のある企画です。仕事を補い合える大学ならではの企画であり、個々のモチベーションを維持し、元気を出す工夫のひとつです。

私の専門は循環器病学ですが、研究は小野寺先生

のご専門の肺循環から始めました。その後は、高血圧から心肥大、心筋梗塞そして心不全に至る動脈硬化性心血管疾患の制圧を主な課題に仕事をしてまいりました。生体の適応と破綻の機序を踏まえ、循環器病の成因から治療へ系統的な診療体系の確立を目指しながら、温浴や森林浴などの癒しの循環器治療にも探索研究を広げています。心血管の再生治療は将来に渡る研究課題であり、基礎研究を推進しつつ、昨年倫理委員会の承認を得て、ヒト心筋梗塞を対象にG-CSF投与による心血管再生とリモデリング抑制を図る臨床試験を開始しました。

教育では、教室最多の40数コマの系統講義に加え、新入生への「医学生らしい生活習慣のすすめ」や臨床実習前の「カルテの書き方」の講義と演習など「隙間領域」も沢山担当しておりますが、常に「分かる講義」を心がけてきました。昨年度、学生の授業評価で第一位の評価を得て素直に感激しました。診療でも「全身を診させていただき全人的に対応する」基本姿勢のもと「患者さんが満足する診療」「患者さんに届く説明」を心がけており、この姿勢は今後も教室員に徹底して参ります。患者さんへの説明とは裏腹に、自分自身の運動不足には益々拍車がかかっています。10年来「エレベーターを使わない」信念で、9階病棟へも歩き続けておりますが、これが唯一の運動という寂しい状況は改めたいと思います。

増加の一途を辿る救急・時間外診療で、循環器、呼吸器、神経、腎の患者さんは当科が担当しております。生命に直結する分野を少ないスタッフで、しかも24時間対応可能な体制を維持するのは容易ではありません。使命感に燃えた教室員の努力が報われるような環境改善を大学・病院にお願いしつつ、「人と知識と技術をいきいきと動かす」工夫を講じたいと思います。今後とも私達、循環・呼吸・神経病態内科にご支援・ご指導をいただきますようお願い申し上げます、就任のご挨拶とさせていただきます。



教授就任のご挨拶

英語教授 内藤 永

平成19年6月25日付けで、一般教育の英語教授を拝命いたしました。学科目としての英語に教授が置かれるのは初めてのことであり、その責任の重さをひしひしと感じています。多岐に渡る職責を果たせるように努力する所存です。本稿では、これまでの研究経歴と、本学における英語教育、最近関心を寄せている研究テーマをご紹介します。就任のご挨拶とさせていただきます。

私は、昭和61年に東北大学文学部に入学し、英語教員を目指して、英語学を専攻しました。そこで、人間が持つ言語能力の科学的解明を目指す、生成文法(Generative Grammar)に出会い、その魅力に引き寄せられ、研究の道に入りました。平成2年に東北大学大学院文学研究科に進学し、カリフォルニア大学への留学を含めた6年間の大学院生活では、一貫して生成文法における格理論の研究を行いました。言語ごとに異なるルールがあるように見える名詞の格は、驚くことに、抽象的なレベルでは同一のメカニズムで説明することができます。私たちは母語と外国語の文法的な違いに悩まされますが、文法の根底を探っていくと、原理的な差異はないことが分かっています。日本語と英語は表面的言語構造が対極的に見えるためでしょうか、文法をあまりに難しく教えているように感じます。文法研究の成果を英語教育にどのように活かすかは、現在でも重要な研究テーマです。

旭川医科大学には、平成8年4月に講師として採用されときからお世話になっています。当時は、医学系、看護系の英語の教科書が数少なく、最新の内容を掲載したものはほとんどありませんでした。学生のモチベーションを上げるために、使用する教材はすべて手作りでした。折良くインターネットが発達した時期と重なり、海外から最新の情報を教材の中に盛り込むことができました。その内容は、毎年実施している学生へのアンケート調査の結果、日本

医学英語教育学会を通じて得られる知見を基に、改訂を重ねています。手作りだけに苦労は多かったものの、その蓄積がその後のネットワーク教材の開発につながりました。iPhoneが米国で発売され注目を浴びていますが、学生が肌身離さず携行する携帯電話の活用を新たな試みとして考えています。

このように学習者のニーズに則し、生きた教材を使いながら、社会活動につながる授業を展開する英語教育は、ESP(English for Specific Purposes)と呼ばれています。最近では、本学の授業実践を起点にESPの研究を進めています。平成17年と平成18年には、ESPに関心を寄せる他大学の英語教員と協同し、北海道の事業所を対象とした英語使用実態調査を行いました。調査の結果、北海道の全事業所の1割において、海外との取引のために英語を日常的に使用していることが判明しました。社員5名の小さな企業においても英語が頻繁に飛び交っています。グローバル化の波は、身近なところに迫っていることを実感しました。

社会は変わり、情報はボーダーレスに飛び交い、技術は目まぐるしく進展していきます。最新の知識もあっという間に陳腐化する時代です。このような時代に対応するために、コミュニケーションの手段として英語を習得することは、活動の幅を広げる上でも非常に重要です。学生の皆さんには、英語のスキルを伝える一方で、後々に残る何かを伝えたいと常日頃考えています。私は生成文法を研究する上で、その思考法を学びました。一つの思考法を修得したことはその後の活動において軸となりました。昨年から開講された英語原典購読という科目で読んだ、1800年代執筆の古典が予想外に学生に好評でした。ここら辺がヒントになるかもしれません。これまでと同様に、学生と共に学びつつ、学内外の多くの方と協同しつつ、本学の発展に寄与したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

卒業生の動向(医学科)

平成19年3月23日(金)に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。

なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

(学生支援課)

区 分		大学及び病院名等	平成18年度		
			男	女	計
進 学	道 内		0	0	0
	道内外その他		0	0	0
	小 計		0	0	0
就 職	道 内	旭川医科大学病院	5	3	8
		北海道大学病院	3	0	3
		旭川厚生病院	3	1	4
		市立旭川病院	3	2	5
		その他	28	11	39
	計		42	17	59
	道 外	大学関係病院	5	2	7
		上記以外の病院等	15	9	24
	計		20	11	31
	小 計		62	28	90
未 定 ・ そ の 他			4	1	5
合 計			66	29	95

上記以外の病院名

道 内：旭川赤十字病院、札幌徳州会病院、札幌手稲溪仁会病院、勤医協中央病院、道北病院、KKR札幌医療センター、北海道社会保険病院、NTT東日本札幌病院、市立札幌病院、北海道がんセンター、札幌厚生病院、医療法人王子総合病院、深川市立病院、帯広厚生病院、名寄市立総合病院、苫小牧市立病院、滝川市立病院、富良野協会病院、恵庭恵み野病院、函館中央病院、函館共愛会病院

道 外：東京大学病院、東京医科歯科大学病院、自治医科大学、新潟大学病院、浜松医科大学病院、安城更正病院、聖隷三方原病院、聖隷横浜病院、岩手県立中央病院、取手協同病院、埼玉社会保険病院、徳島健生病院、国保旭中央病院、沖縄協同病院、城北病院、市立池田病院、東京厚生年金病院、長岡赤十字病院、国立病院機構災害医療センター、東京都老人医療センター、医療法人近森病院、国立相模原病院、横須賀うわまち病院、神戸労災病院、安曇総合病院、島根県立中央病院、京都市立病院、県立宮崎病院

卒業生の動向(看護学科)

平成19年3月23日(金)に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。

なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

(学生支援課)

区 分		大学及び病院名等	平成18年度		
			男	女	計
進 学	道 内	北海道教育大学函館校	0	1	1
	道内外その他		0	1	1
	小 計		0	2	2
就 職	道 内	旭川医科大学病院	2	9	11
		北海道大学病院	0	7	7
		KKR札幌医療センター	0	9	9
		帯広厚生病院	1	2	3
		その他	2	20	22
	計		5	47	52
	道 外	大学関係病院	1	11	12
		上記以外の病院等	0	5	5
	計		1	16	17
	小 計		6	63	69
未 定 ・ そ の 他			0	0	0
合 計			6	65	71

上記以外の病院名

道 内：旭川赤十字病院、市立旭川病院、旭川厚生病院、北海道社会保険病院、市立札幌病院、NTT東日本札幌病院、札幌東徳州会病院、北海道がんセンター、帯広厚生病院、釧路赤十字病院、札幌市、釧路市、愛別町、新得町、日高町、弟子屈町、上士幌町、豊浦町、鶴居村

道 外：千葉大学病院、京都大学病院、金沢大学病院、東海大学病院、東京医科大学病院、順天堂大学病院、聖隷浜松病院、仙台市立病院、訪問看護施設

医大祭2007が開催されました

去る6月8日（金）、9日（土）、10日（日）の日程で、本学の大学祭である医大祭2007が開催されました。今回は「新種発見!!旭医ジャングル〜この週末は動物園に負けない!!〜」と題して医科大学という未知の世界を周辺の住民の皆さんに知っていただこうという主旨により開催されました。一般公開日である土曜日、日曜日ともに、比較的天候にも恵まれて（去年は土曜日が昼過ぎまで大雨……）大勢の来場者が朝早くからフリーマーケットや模擬店にいられて大変盛況でした。特にゲームコーナーでは、小さなお客様が射的や輪投げに挑み大きな歓声を上げていました。

恒例の学生ロビーコンサートでは、室内合奏団の演奏に沢山の聴衆が集まり心癒される一時を過ごしていました。また、医科大学という特性を生かした「医学健康ひろば」には老若男女沢山の方々が救命講習、健康チェックコーナー、妊婦・老人体験コーナーにてテーマに沿った医大祭を体験されていたようです。（逆転めがね体験とか脳年齢というものもありましたね。）午後からは、元オリンピック日本代表である荻原次晴氏により「次に晴ればそれでいい」と題したトークショーが看護学科棟大講義室にて開催され、某競○○キー部の面々と大いに盛り上がっていました。夜は恒例の花火が打ち上げられ医大祭の夜を華やかに彩っていました。翌日の最終日は、2部構成の公開講座が開催され内科学講座循環・呼吸・神経病態学分野の小笠寿之先生により

まず「睡眠時無呼吸症候群〜朝の目覚めは爽快ですか?〜」と題した医大祭ならではの講演と旭川地方裁判所の裁判官により「これから始まる裁判員制度について」と題した特別講演が開催されました。前日に続いて学生ロビーにて、医大祭においては初披露となります合唱部のコンサートが、その後引き続きプラスアンサンプルのコンサートが開催され沢山の聴衆が訪れ、その演奏に聴き入っていました。また、体育館にて恒例の「お笑いライブ2007」が開催され沢山の来場者で盛り上がっていました。なお、最終日も模擬店やゲームコーナーには沢山の来場者がいられたのは言うまでもありません。各学生団体や実行委員会並びにスタッフが、いろんなイベントに一生懸命に努力していた姿はすばらしいと感じました。ただ、開催された3日間を通して、本当に「新種発見!!」だったのかは良く分からなかったのが残念でした。来場者には見えない前夜祭とか夜の時間帯に新種が出没していたのかもしれませんが。そんな中にも、なんとなく嬉しいことがありました。土曜日に一人で来場してくれた小学校5・6年生ぐらいの女の子がいて開口一番「国境なき医師団のパネル展示の場所はどこですか?」と尋ねられた時に「ああこれが医大祭なんだ」って思いました。また、車椅子で来場された方が2階まで移動するのを手伝っている他の来場者の姿を見かけたときには心が温まる思いでした。来年も、今年以上に地域に開放された大学の姿を見せることができる医大祭を目指してほしいと心から願っています。

医大祭スナップ



▲ゲームコーナー

花火です?▶



▼模擬店



▲フリーマーケット

▼救命講習



▲古本市

◀健康チェックしてます!

▼受付



第54回(平成19年度)北海道地区大学体育大会開催される

7月14日(土)15日(日)の日程で第54回(平成19年度)北海道地区大学体育大会の弓道大会が本学の当番により美瑛町弓道場を会場に開催されました。

本大会は3年連続の当番の最後の大会であり、運営スタッフである本学弓道部の努力により無事大会を終了できたことを報告します。大会委員長を務めていただきました弓道部顧問の微生物学講座准教授

吉田逸朗先生、そして運営スタッフとして頑張ってくれた弓道部員諸君3年間本当にお疲れ様でした。なお、今年の大会は、男子は帯広畜産大学が、女子は北海道教育大学札幌校が優勝しましたが、男女ともに準優勝、第三位が同点により、それぞれ4大学が決中を行うなどの大接戦となりました。第三位までの結果は別表のとおりです。



▲開会式



▲女子決中



▲閉会式



▲男子決中



▲競技風景



▲表彰式男子



▲表彰式女子

●男子結果

優 勝	帯 広 畜 産 大 学 35中
準 優 勝	酪 農 学 園 大 学 32 (7) 中
第 三 位	小 樽 商 科 大 学 32 (5) 中

() 内は同点による決中の中数

●女子結果

優 勝	北海道教育大学札幌校 20中
準 優 勝	帯 広 畜 産 大 学 18 (6) 中
第 三 位	北 海 道 大 学 18 (3) 中

() 内は同点による決中の中数

合同演奏会が開催されました

7月15日(日)大雪クリスタルホールにて室内合奏団とブラスアンサンブルにより恒例の合同演奏会が開催されました。ここからは、当日会場に足を運んでいただいた学生支援課OBの某氏による記事と写真を掲載します。

「7月15日(日)の午後2時から大雪クリスタルホールにおいて、本学の室内合奏団とブラスアンサンブルによる合同演奏会が行われました。毎年行われておりますこのコンサートを楽しみにしている人たちも多く、開演間近で8割方の人場者で前方に空席が見える程度でした。

音楽系のコンサートが行われる折には、なぜか小生に別のスケジュールが入り、日程を調整すると急遽中止などと空振りが続いていましたので、今度こそと思って見に行きました。無料なのです。

室内合奏団は、フォーマルなコスチュームですが、医大祭での彼らの演奏態度を見てみると、かしこまらずに気楽にゆったりと聴いてくださいという姿勢が伝わってきます。ブラスアンサンブルは、ずばりカジュアルな感覚でかこまっている人がいるなら、まず肩の力を抜いてあげますという雰囲気です。

弦楽器は重厚で深みのある味わい。4種類だけとはいえ演奏者は大勢で、第一バイオリン、第二バイオリンのように、それぞれが別な音程を奏で、全体として複雑玄妙な味を出してきます。

木管・金管楽器の多彩な音色にパーカッションの絶妙なリズムがからむと、わくわくするような、どきどきするような感覚になります。ブラスアンサンブルの演奏には「華」を感じようになってきました。

その2つがいっしょになったなら——学生達は合同演奏会と言っていますが、これはなんと控えめな言葉——まごうことなく管弦楽、オーケストラです。え？演奏の出来栄ですか？素晴らしいという以外、何も言うことはありません。室内合奏団のトレーナーをされている加藤夏恵さんの指揮も見事な切れを見せ、今回は芯から楽しませていただきました。

そのうえ、アンコールに应运えてくれた曲が(医大祭のアンコールで室内合奏団が聴かせてくれた)ハンガリアン舞曲でした。彼らには、医大祭でのアンコールのお礼を何と言ったものかと考えていました。クラシックの中では小生が最も好む曲なのです。曲が始まると、感激で動けなくなりました。その昔、このコンサートで初めに演奏された曲でした。今度は撮影を気にせず鑑賞に専念。「あなたはこれ以上何をお望みですか？」

何も望みません、大満足、最高です。映画評論家水野晴郎さんの言葉を真似るなら、『いやあ、音楽って「本っ当に」いいもんですネ、では又いっしょに楽しみましょう。』というところであります。」



サマーコンサート開催される

7月21日(土)18時30分より合唱部のサマーコンサートが、7月22日(日)19時00時よりギター部のサマーコンサートが、それぞれ病院玄関ロビーにて開催されまし

た。入院されている方々の夏の夜のひと時を音楽で癒そうと日々練習を重ねてきた成果をいかに披露し大勢の聴衆より暖かい拍手が贈られていました。



「音楽の夕べ」開催される

7月28日（土）14時00分より大学病院玄関ロビーにて本学音楽系学生団体であるギター部、合唱部、室内合奏団、プラスアンサンブルによります恒例の「音楽の夕べ」が開催されました。例年は夏休み終盤である8月後半に開催されていましたが、練習期間や参加人数の都合もあり、この日の開催となりました。当日は朝からの雷雨により来場される方々が

少ないのではと心配されましたが、写真のとおり沢山の方が来場され大盛況となりました。各部の演奏時間が30分という短いコンサートではありましたが、日頃の練習の成果を大いに発揮し入院されている方々を始め、近隣から来場された方々より沢山の拍手が贈られて演奏するメンバーも熱演を繰広げて大いに盛り上がっていたことをお伝えします。



ギター部



合唱部



室内合奏団



プラス
アンサンブル



クラブ紹介

準硬式野球部

準硬式野球部 主将 佐々木貴弘

現在、準硬式野球部はプレーヤー16人、マネージャー10人で活動しています。ここ数年間において、新入部員の減少のため年々部員数が減ってきているという厳しい状態に置かれています。

野球というスポーツは、試合に出場する9人に加えベンチにいる選手、監督、マネージャーを含む全員の団結力が必要な団体競技でもあり、また見方を変えれば、投手対打者という対一の個人競技でもあるとも言えると思います。そのため、野球だけに限らないとは思いますが、勝つためにはチームの連携を向上させつつ、個々人の能力も向上していかなければならないスポーツです。また、野球と一言に言っても打撃・守備・走塁という大きく分けて3つの要素から成っており、それぞれに魅力があるスポーツであると思います。

今年のチームにおいては「メリハリ」というものを大切にしてきました。つまり、練習などやる時はしっかりやり、楽しむときは思いっきり楽しむといったようなことです。状況に応じて適切に気持ちを切り替えるということは、攻めと守りがはっきり分かれている野球というスポーツにおいては非常に大事である考えたからであり、しっかり「メリハリ」をつけることができるようにな

るということは、将来的にも大切なことであると思います。また、私達は将来プロ野球選手になるわけではないので、野球が上手になることが大切なのではなく、上手くなろうと努力していく過程が大切であると考えています。そして、「野球即人道」という言葉があるように、野球というスポーツを通じて人間的に成長し、将来医師や看護師として働く上で大切なことを学んでいけたらと思っています。

最後になりましたが、吉田部長をはじめ多くのOB・OGの皆様には日頃から温かい御指導や多大なる御支援を頂き、この場を借りまして、深く感謝申し上げます。今後も皆様の温かい御声援を受けながら、日々頑張っていきたいと思っています。



山岳部

山岳部 部長 加藤 剛

私たちの部活は名前の通り、山を登ります。雪がとけてから活動が始まり雪が降るまでに終わります。だいたい5月くらいから10月の終わりころになります。北海道の自然をととても味わうことができる部活であると思います。5月の始めは雪が溶け始め、その間から小さな花が顔をだしはじめるのでそのような景色の中、山を歩くことができます。7月8月9月は天気恵まれ、青空であれば、青々とした山を歩くことができます。10月ごろは葉が色づき始めるので、落ち着いた美しさの中の山を歩くことができます。高い山から低い山までそれぞれ個人が登りたい山を木曜日の部会の際に話し合い週末に登りにいきます。あまり高い山は登らない方や山ではなく沼めぐりなどのみ参加されるかたもいます。今年は多くの部員に恵まれ、毎週様々な山への企画がでています。学祭時には、山岳部の毎年の恒例行事として、山行にいかってきました。今年はニセコの羊蹄山に登り、山小屋に泊まってきました。たどりつくまでは大変でしたが、とても良い天気です。頂上には雪が残っていて眺めはとても美しかったです。下山の朝は

日の出まえに起き、日の出を楽しむこともできました。山や自然は人や機械の世界と異なるため、頭の中で考えるぐちゃぐちゃした気持ちをすっきりさせる機会を持つことができます。山への感じ方はそれぞれなのでこの感想はすべてのかたにあてはまるものではないかもしれませんが、山のあとは大抵の場合温泉へいきます。温泉は緊張や疲れをとるのにとても有効的です。北海道は多くの種類の温泉があり、先輩の中では温泉に詳しいかたがいるため興味があることを告げれば、いろいろなところへ連れて行ってもらえます。今年も自分のスタイルにあった山登りをして山を楽しんでいきたいです。



医 療 研 究 会

医療研究会 部長 佐藤裕基

医療研究会は、「医療に対して関心を持ち、理解を深める」事を目的として、昭和50年に設立されました。その名前からか、「堅い」イメージを持たれることもしばしばですが、実際の雰囲気は大変和やかです。現在は医大祭における救命講習と医学展を中心とし、学外では医療に関連する講習会やボランティア活動も行っています。

医大祭での救命講習では、主に心肺蘇生法（BLS）と自動体外除細動器（AED）の使用法について解説しています。各地で急速に設置の進んでいるAEDは救命率の飛躍的な向上に貢献しており、最近ではメディアでも頻繁に取り上げられています。『「いざという時」に大切な人を守るためにも、心肺蘇生法、AEDの使用法について広く知らせる事が重要である。』一私達はそのような想いで救命講習を行っています。また、医学展では、医科大学というリソースに恵まれた環境を生かし、毎年多くの身近なテーマをパネル展示として発表しています。本年度は「身近な医薬品の正しい使い方」、「献血について」、「避妊と性病に関して」、「食べ物のアレルギーについて」、「メタボリックシンドロームについて」という5つのテーマで発表を行いました。いずれの活動も年を

追うごとに進化し、一般公開の際にも好評を博しています。

これらの活動に伴い、学外での活動もますます積極的におこなっています。平成18年度には、日本臨床麻酔学会が旭川市で開催されたのに合わせ、旭川市街で救命講習を行いました。また医学展での献血に関する発表がきっかけとなり、本年度からは献血推進キャンペーンに本学ボランティア部と共に参画しています。

本年度は新入生にも恵まれ、部員同士の協力体制も一層強固なものとなりました。医療研究会の顧問であり、またOBでもある宮本和俊先生の長年にわたるご薫陶と、OB・OGの皆さんの多大なご協力に感謝し、この稿を閉じたいと思います。



ボ ラ ン テ ィ ア 部

ボランティア部 岡澤友希

みなさんはボランティアという言葉からどのようなイメージが浮かびますか？「ためになりそう」「面白そう」と思う方もいれば「面倒くさそう」「偽善っぽい」など様々なイメージを持つ方がいるかと思いますが、それで良いと思います。ただ、少し心に留めておいてほしいのは、ボランティアを必要としている人がいて、誰かがそのボランティアをすることで助かる人達がいるということです。

現在ボランティア部は約15名で活動しています。（写真は諸事情により少ない人数ですが・・・）活動内容は、月に2、3回外来に来る車椅子利用患者さんのお手伝いや、その患者さんとドライブに行ったり、毎週土曜日には障害をもつ子供達とのふれあいをしたり、月に一度音楽運動療法という療法のお手伝いをしたりと様々な活動をしています。また今年の夏には滝川で行われる「そらぶちキッズキャンプ」という内臓疾患を持つ子供達と一緒に過ごすキャンプにも参加しています。どの活動も強制ではなく、各ボランティアに関する情報をメーリングリストで流して、興味のあるものに参加してもらうという活動形態をとっています。

ボランティアに参加して良かったなと思えるのは、

患者さんや子供達の笑顔を見ることができた瞬間です。多少辛いことがあっても、その笑顔を見るだけで癒されてしまいます。また将来、医療従事者になる自分たちにとって、こういったボランティアをすることは、患者さんの立場からみる医療というものを実感できて非常に勉強になります。実際臨床現場に入る前に患者さんと触れあうということはなかなかできるものではありません。こういった体験は必ず将来にも役立つのではないかと思います。

今はまだ活動している部員も少なく、どのボランティアに対しても十分な参加ができていないという状況とは言い難いですが、これからも地道に少しずつ活動を充実させていきたいと思っています。1人でも多くの人の笑顔が見れるように。



教員の異動

H19.6.1	昇任	医学部小児科学講座	講師	吉田	真
H19.6.25	昇任	医学部内科学講座(循環・呼吸・神経病態内科学分野)	教授	長谷部	直幸
H19.6.25	昇任	医学部英語	教授	内藤	永
H19.7.1	採用	医学部法医学講座	准教授	渡邊	智
H19.7.1	配置換	病院腫瘍センター	准教授	鳥本	悦宏
H19.7.1	採用	病院第二内科	講師	牧野	雄一
H19.7.1	配置換	医学部内科学講座(消化器・血液腫瘍制御内科学分野)	講師	蘆田	知史
H19.7.1	昇任	病院第三内科	講師	佐藤	一也

医大祭2007を終えて

旭川医科大学大学祭実行委員会

実行委員長 高橋 未来



医大祭も終わって、早二ヶ月が過ぎようとしています。残務整理も終わり、実行委員一同ようやく落ち着きを取り戻した感があります。

今年の医大祭は、麻疹の流行の影響による中止が懸念されておりましたが、当日まで目立った発症の報告もなく、また開催日両日も暑いぐらいの天候に恵まれて、無事に医大祭を行うことができました。

さて、今回の医大祭のテーマは「新種発見!! 旭医ジャングル ～この週末は動物園に負けない～」ということでした。このテーマには前号のこの欄で書いたとおり、医療不信が続く中で「医大」という存在が、いわばジャングルの様な未知の領域という感が拭えずにいることを踏まえ、旭川医科大学をもっと知ってもらおうという気持ちがこめられていました。普段私たち医大生はどこでどのように勉強をしているのか、普段医大の先生はどこでどのように教育、研究をしているのか。病院だけではない旭川医科大学、「新種の」旭川医科大学を周辺住民の皆様に限らず、全道の皆様に知ってほしい。そしていかに私たち「旭医ジャングル」の住人が自分たちの考える領域を超えたはるかに「社会的な存在」として、周囲から期待と批判という両極的な鋭い視線にさらされているかを実感して欲しい。これらの願いをかなえるために、実行委員一同、昨年10月より創意工夫を凝らしてきましたが、いかがでしたでしょうか。医大祭に足を運ばれた方には、少しでもその意匠の一端が感じられたと思います。

これほどまでに大きなイベントというものは、当然一人で計画できるものでもなく、実行もできません。したがって、今回の医大祭を行う際にも80名を超える委員とヘルパー、そして学生支援課をはじめとする多数の事務職員の方の力添えが不可欠でした。私自身、今回実行委員長という大役を勤めさせていただきましたが、これまでこのような大きな組織の先頭に立つことはなく、またその様な器だとも

思っておりませんでした。実際に、主将を務めるラグビー部との両立もうまくできずに双方に多大な迷惑をおかけしたこともありました。しかしながら、この医大祭を作っていくなかで、大きなものごとをつくっていく大変さ、大勢の人をまとめることの大変さ、人の意見をうまく取り入れることの難しさ、そして大勢で協力してものごとをつくることの大切さなど、この場で学べたことを数え上げればキリがありません。そして、これらのことは医大祭に関わったすべての学生が感じたことだろうとも思います。

医大祭を振り返りながらここまで書いたところで医大祭の2つの側面が浮かんできました。医大祭をおこなう目的のひとつは、最初にあげたように、旭川医科大学の内外の交流および広報にあることは、もはや言わずもがなでしょう。そして、もうひとつの目的は学生の教育にあったのではないかと、いまさらながら気づきました。私たちは医師、看護師、研究職等、どのような道に進んでも人との交流を要求されます。一人の患者に対して「治療」という大きなものごとを作るために大勢の医療従事者が協力することを必要とされます。「新しい治療法」を確立するために、大勢の研究者、患者、臨床医が協力することを必要とされます。食い違う意見をぶつけ合う、そして折衷案を出して、それでもうまくいかず、また新しい意見が出てくる。まさに今回の医大祭でした。そんなことを考えると、医大祭はどんな教科書よりも切実に私たちを教育していたのかなと感じてしまいます。

そろそろ来期の医大祭実行委員への引継ぎを考える時期がやってきました。来年はどのような医大祭が待っているのか、今からとても楽しみで仕方がありません。

最後になりましたが、このような委員長に対して最後までついてきていただいたチーフ、委員、ヘルパーの皆様、無理なお願いを聞いていただいた教員、職員の皆様、そして来場された皆様、おかげさまで無事医大祭を終了することができました。ありがとうございました。